「未来を守る私たちの今」

岩手県立一関第一高等学校附属中学校　2年　伊東　若菜

「クーラーなんて必要ないと思ったのに。」
今年の八月上旬、熱中症にご注意ください、という見出しのテレビを見ながら、母はポツリとつぶやいた。私の家にはクーラーが無い。家を改築したのは十五年前、私が生まれる少し前のことだったそうだ。十年ひと昔という言葉があるが、十五年前の昔と今とで、本当に気候は変わっているのだろうか。気象庁の観測データをもとに、一関市の八月の三十五度を上回った猛暑日の日数の違いを確かめることにした。

まず、わが家を改築した二〇〇四年は、驚くことに、猛暑日が一日もない。翌二〇〇五年の猛暑日は二日だった。ところが、二〇一〇年には七日あり、この年気象庁は三十年に一度の異常気象だと発表している。さらに二〇一一年の猛暑日が二日、二〇一二年が五日、二〇一四年が三日、二〇一五年が六日、二〇一八年が四日、そして、二〇一九年は六日と、八月の猛暑日の日数だけを単純に比較しただけでも昔と今の違いは歴然としている。「三十年に一度の異常気象」どころか、ここ数年というもの、「異常」が常態化していると言えよう。確かにここ一ヶ月を振り返っただけでも、台風やゲリラ豪雨の規模とその被害が例年より大きくなっていると感じる。

このように、私たちの世代は地球温暖化により、危機的な状況に陥っている。そのことについて他の人はどう感じているのか、同級生に聞いてみた。すると、「地球温暖化に興味を持っている」と回答した人は全体の半分ほどで、思ったより多かった。しかし、これから「温暖化防止に関わる工夫をしていきたいと思っていますか」という質問に対して多くの人がいいえと答えていた。最近は温暖化についてニュースや新聞でも大きく取り上げられている。そのため、現状を知らない、という人はほとんどいないだろう。しかし、まだ大丈夫だと勘違いしている人がまだまだ数多くいるのではないかと考えた。だからこそ、これからどうなるかを知り、危機感を持ってもらうことが必要だろう。

私は今、買い物にはマイバッグを持ち歩いたり、使っていない充電器などのプラグを抜いたりと日常の中で工夫をしている。また、最近、教室移動の際に扇風機や電気が点けっ放しになっているときは消し、蛇口から水が出しっ放しになっているときは止めるように気をつけている。このように身の回りで起きていることに目を向け、少し気を遣うだけで温暖化防止に貢献できるのだ。

私の住む一関市では温暖化について考えるイベントや、植樹、ごみ拾いなどのボランティア活動を行っている。私も小学生の頃に植樹を体験したことがある。私がみた大きな木は、これまで何十年もその場所の自然環境を守ってきた。私が植えた小さな木も、やがて、私たちのふるさとを守る、大きな傘となるのだろう。また、半年に一度ecoという温暖化防止を訴えかける広報も配布されている。なかなか聞くことができない専門家の方の話や、現在一関市で行っている温暖化対策、今の私たちにできることなどが記してあった。これからは、このような地元の広報にも目を向け、自身の生活に取り入れていきたい。身の回りに目を向け、公共的な取り組みへの参加や、新聞、広報などの観覧を積極的に行い、周りに呼びかけていくことで、多くの人が温暖化を防止するという意識を持

てるのではないだろうか。

私は将来、環境問題に関われる国連環境計画などの機関や、ジャーナリストとして働きたい。実際に温暖化などの影響で変化が生まれている場所にいき、自分の目で確かめ、現地の人の声を自分の耳で聞く。また、実際にその場所の活動に参加し、人々の思いや願いを感じる。そして、自分の持っている全てを世界に発信していく。そうすることにより私が大好きな青く美しい地球を、緑豊かな地元を守っていくことに貢献していきたい。そして、次の世代の人々が、心地よく暮らせる環境をつくっていきたい。

未来の地球は、今を生きる私たちにかかっている。このことを忘れず、今できることを精一杯やろうと思う。元通りにするのは、壊すことより難しい。そもそも完全に元通りにすることなどできない不可逆的なものなのだ。それでも、人間と自然が共存できる世界をつくっていきたいと、私は思う。一部の人が頑張っても、現状を変えることなどできない。しかし、世界中の人が温暖化防止について意識できれば、やがて地球は希望へと変わっていくだろう。だからこそ、目の前の大きな問題から目を背けず、手を取り合い、立ち向かっていこう。些細なことであっても、私たちが日々心がけて行動することで、地球の未来は変えられる。